

冷徹ドクターの契約妻になったら
本物の愛情を教え込まれました

五月晴れの空の下、社殿を取り囲む松の若葉がキラキラと輝いている。予報では一日中雨模様だったはずの天気だが、ついさつき雲ひとつない晴天になった。厳かな雅楽の演奏が聞こえてきて、いやが上にも緊張が高まってくる。

(どうか、何もかも上手くいきますように)

綿帽子に白無垢姿の紀香は、そう願いながら齋主と巫女の先導で神社の本殿に向けて歩き始める。「足元に気を付けて」

隣を歩く伊坂圭一郎が、小さな声で注意を促してくる。

紀香は頷き、紋付き袴に身を包む花婿の凛々しさに頬を赤く染めた。

拝殿に入り、参列者全員がお祓いで心身を清めたあと、齋主が祝詞を上げて神さまに新郎新婦の結婚を報告する。

皆が見守る中、二人は三三九度で夫婦の縁を堅く結び、共に結婚の誓いを読み上げて神前に玉串を捧げる。両家の親族たちは互いの絆を深めるために杯を交わし、齋主が式の終了を神さまに報告する。

式は滞りなく執り行われ、紀香と圭一郎は夫婦になった。

けれど、この結婚は偽装であり、一年後に解消されると決まっている。

（神さま、申し訳ありません。私の命が果てた後、二人分の償いは必ずします。だから、どうか圭一郎さんを咎めないでください）

たとえ期限付きであっても、紀香は圭一郎を心から愛している。今日の話は、この先どれほど月日が流れても、きっと忘れることはないだろう。

涙が頬を伝うと、圭一郎がハンカチでそっと拭き取ってくれた。

できることなら、夫婦でいる間は二人とも幸せでありますように――

紀香は心の底からそう願いながら、圭一郎とともに神殿を後にした。



『ただいま、この電車は車両点検が必要なため、しばらく停車いたします』

乗っている電車のアナウンスを耳にして、八木沢紀香は心の中で小さく溜息をついた。

約束の時刻は、午後二時。余裕をもって出かけたから、何もなければ二十分前に目的地の最寄り駅に到着する予定だったのだが。

紀香は現在二十六歳で、東京の女子大学を卒業後、都内に本社がある「流星銀行」に新卒で採用された。入行当初は店舗の窓口で仕事にあたっていたが、一昨年健康保険組合に異動になり、現在

は健康診断や受診管理などの業務を担当している。

（しばらくって、どれくらいだろう？ 点検なら五分くらい？）

四月になったばかりの月曜日の今日は晴天で、何かしらイベントでもあったのか地下鉄の車内はかなり混み合っている。

（ジャケット、脱いだほうがよかったかな）

流星銀行では十年前に制服が廃止され、現在は落ち着いた色合いのものであれば自由な服装での勤務が認められるようになった。

紀香が着ているのは先月、友人が勤務している店で買った紺色のジャケットのセットアップだ。前方の窓に、自分の顔がうつすらと映っている。

卵型の顔に、丸くてちんまりとした目鼻立ち。笑うと大きく横に広がるおちよぽ口には淡いピンク色のリップクリームが塗ってある。

車内の照明のせいとか、目の下にクマができてるように見えるのが気に入らない。

とにかく、早く動いてくれないと困る！

紀香は眉を蹙め、見るとはなしに周囲に視線を走らせる。近くにいるのはスーツ姿のビジネスパーソンや私服姿の中年女性。少し離れた位置にあるドアのそばに立つ大学生らしい女性たちが、小声で何かしら話し合っている。

（ドアのそば、寄りかかれるから楽なんだよね。でも、私はもうあそこに立つことはないかも）
今乗っている電車は、紀香が流星銀行に入行してからの二年半、通勤でも使っていた。

朝の車内は常に満員で、乗り降りや立ち位置は人の波次第。区間によっては身動きするのも困難だし、次の駅に到着するまでその場に居続けるしかなかった。

電車の遅延が気になりつつも、頭の中に過去の記憶が浮かんでくる。

社会人になって二年目の夏、紀香はいつものとおりに通勤電車に乗り込み、人の流れに押されるようにしてドアの横の壁際に立った。

近くのドアは、ふたつ先の駅まで閉じたままだ。

電車が揺れるたびに背中が壁と座席の仕切りの間に押し込まれ、身動きひとつとれなくなる。

そのまま何事も起きなければよかったのだが、紀香はそこで人生初の痴漢被害に遭ってしまったのだ。それ以来、どんなに押されようとドアの近くを陣取ったことはなく、できる限り人目につきやすい座席前に立つようにしている。

（今思い出しても気持ち悪い……だけど、痴漢に遭わなかったら、王子さまに会うこともなかったんだよね）

痴漢は紀香が無抵抗なのをいいことに、洋服の上からヒップラインを撫で回し、あろうことかスカートの中に手を入れて直接肌に触れようとしてきた。

当時、紀香は被害に遭ったショックで声を上げることもままならず、恐怖に震えるばかりだった。そんな時、近くにいたスーツ姿の男性が異変に気づき、紀香を危機的状况から助け出してくれたのだ。

『おい、何をしているんだ！』

男性は毅然とした態度で痴漢男に声をかけ、ただちに卑劣な行為を止めさせてくれた。その上、逃げようとする痴漢男を締め上げて次の駅で降車し、罪を認めるまで決して手を緩めなかったのだ。（本当に助かったし、いくら感謝しても足りないくらい。なのに、私ったらろくにお礼もしないまま立ち去ることになっちゃって……）

降車した際、暴れる痴漢男を避けるために十数人の乗客がホームに降り立っていた。当然、被害者である紀香も降車したが、あまりの出来事にその場に立ち尽くし、何もできなかった。

ほどなくして駅員がやってきて、男性が率先して事情を話してくれた。

痴漢男は駅員に捕らえられ、紀香は詳しいいきさつを説明するために駅務室に向かった。話している時はまだ助けてくれた男性は一緒だったように思う。しかし、気がついた時には男性はいなくなっており、結局まともに礼も言えないままになってしまったのだ。

むろん、駅の事務所に行っているいろいろと訊ねてみたが、助けてくれた男性については何もわからずじまいだった。けれど、彼の顔は今でもはっきりと覚えているし、きっとこれからも忘れることはないだろう。

（本当に、かっこよかった。行動だけじゃなくて、見た目も完璧な王子さまだったな）

有無を言わず痴漢を押さえつけた男性の身のこなしは見事だったし、犯人は抵抗する間もなくホームにうつぶせになっていた。その上、彼は被害に遭った紀香を気遣う言葉までかけてくれたのだ。

『大丈夫ですか？』

男性の声は低く落ち着いており、こちらを見る視線は強い正義感に溢れていた。それだけでも忘れがたい印象を残したが、彼は紀香が生まれてこの方見たことがないほど完璧な容姿をしていたのだ。

きりりとした眉に、スッと伸びた鼻筋。涼やかな目はくっきりとした二重瞼で、輪郭や唇の形なども非の打ち所がないほど整っていた。彼と関わった時間は僅かだったけれど、男性の顔は深く脳に刷り込まれており、いつでも自由に思い出すことができるくらいだ。

あの時、もっと上手く立ち回ることができていたら。

せめて、名前だけでも聞けばよかった。

あれ以来、何度もそう考えて後悔した。

それだけ彼に感謝していたし、もしかた会える機会をもらえらしたら、今度こそきちんと礼を言いたい——そう願いつづけているが、おそらく叶うことはないだろうと諦めている。

「ねえ、ちょっとこれ見て。この先の踏切で、車が立ち往生してるらしいよ」

ドアのそばにいる女性が、仲間にそう話す声が聞こえてきた。たぶん、SNSで情報を得たのだろう。そちらを見ると、彼女たちはスマートフォン画面を覗き込み、そろって不機嫌そうな表情を浮かべている。

「なにそれ。早く動いてくれないと、バイトに遅れちゃうんですけど」

「事故じゃないみただし、さっさと片づけて運転再開してよ」

停車の原因がわかったとはいえ、電車が止まってからすでに十五分が過ぎようとしている。

せっかく余裕を持って出かけたのに、このままだと約束の時間に遅れてしまいそうだ。

それだけは、困る！

担当者に電話しようにも車内での通話はマナー違反だ。仕方なく、事前に知らされていたメールアドレス宛に遅れる可能性があるかと連絡を入れる。

(メール、見てくれるといいけど)

流星銀行では毎年六月から九月の間で健康診断を実施しており、紀香はこれから新たに受診契約を結ぶべく、都心にある「伊坂総合病院」を訪ねることになっている。

同病院は都内の中心部にある持株型医療法人で、病床数はおよそ九百。運営するのは創設者である伊坂家で、昭和二十五年の設立以来、すべての科において国内トップクラスの技量を誇っている(ある程度話についてはいるけど、契約締結の時間に遅れるなんて絶対にしちゃダメでしょ)

流星銀行の本社には二千五百人強の社員がおり、東京近郊の支店に所属する者を合わせると約一万三千人になる。それらは全員、流星銀行健康保険組合に加入する被保険者であり、全員が健康診断の受診対象者だ。そして、被保険者に扶養する配偶者がいる場合は、その人も対象者となる。

その結果、健診対象者は総勢およそ一万九千人に達し、全員に受診してもらうためには、複数の病院と契約して受診環境を整えなければならない。

しかし、長年の受け入れ先だった大型施設が設備故障により一時的な閉鎖し、急遽代替病院を探さねばならなくなった。

むろん、受け入れ先は相応の規模の施設でなくてはならず、いくつかの候補の中でもっとも理想

的なのが伊坂総合病院なのだ。

支店から異動してきた当初、紀香は全国の医療機関から提出されてきた診療報酬の明細書の処理をする業務を任されていた。だが、昨年末に同僚が一身上の都合により退職し、彼が担当していた業務をそっくり任されることになった。

引き継ぎはきちんとしてもらったが、新規で医療機関と契約をする業務にあたるのは、これがはじめだ。

新しく担当になって最初の大事な、紀香は最大限の注意を払いながら話を進めてきた。

対応してくれたのは医事課に所属する川端かわぼたという五十代の女性で、彼女とは以前、外部の機関が主催する医療関係者勉強会で何度か顔を合わせたことがあった。たまたま事前に決められていた席も近く、二度ほどランチを一緒に食べた間柄だ。

健康診断は自由診療で利益率も高く、企業と契約すれば安定した収入を確保できる。流星銀行の社員は首都圏に集中しており、そのうちの十数パーセントが伊坂総合病院で健康診断を受診する見込みだ。

話し合いはスムーズに進み、あとは最終的な確認と契約書の取り交わしのみになっている。けれど、無事契約完了となるまで気を抜くわけにはいかないし、顔見知りとはいえ遅刻して礼を失するなど絶対にしてはならない。

乗客がイライラを募もらせる中、停車から二十分が経過した頃にようやく運転再開のアナウンスが流れた。以後は滞りなく目的の駅まで進んだものの、電車が病院の最寄り駅に着いたのは午後二時

ジャストだ。

紀香はホームに着くなり、人混みをすり抜けるようにして改札に続く階段に向かった。そして、ようやく人の邪魔にならない壁際にたどり着き、川端に電話をかけた。

幸い、彼女は紀香が送信したメールを読んでおり、約束の時刻に遅れてしまうことを了承してくれた。それでも、一秒でも早く目的地に着かねばならない。

駅から病院までは徒歩七分。

紀香は人がまばらになった改札を速足で抜け、外に出るなり猛然と走り出した。本来なら余裕を持って病院に到着し、身だしなみを整えるために化粧室に立ち寄るつもりだったが、もうそんなことをしている場合ではない。

午後二時五分に病院の敷地に足を踏み入れ、正面入口を横目に本館の裏手にある西館に向かう。建物は八階建てで、五階からは病院関係者エリアになっているが、ほかのフロアには歯科と耳鼻科の診療室があり、一階には銀行のATMやコンビニエンスストアが入っている。

乱れ切った息を整えながらエレベーターに乗り込み、指定されている西館六階の第四会議室を目指す。フロアに到着し、誰もいないのを確認してから大きく深呼吸をする。壁にある案内板を確認し、会議室に向けて歩き出した。けれど、あるのは倉庫らしき部屋ばかりで、すぐに間違った方向に進んでいると悟った。

急いで元いた場所まで引き返した時、タイミングよく白いドクターコートを着た女性がエレベーターから降りてきた。あやうくぶつかりそうになり、とっさに立ち止まって一歩下がる。

「す、すみません」

紀香の声に立ち止まったその人は、びつくりするほど頭が小さくて整った顔立ちをしている。腕にカルテの束を抱えているところからしても、医師であることは間違いない。彼女は一瞬だけ紀香を振り返ったが、無言のまま立ち去ろうとする。

「あのっ……お忙しいところ、すみません。西館六階の第四会議室の場所を教えてくださいですが」

紀香に話しかけられ、女性医師が眉間に縦皺を寄せて立ち止まった。言動からして患者ではないと判断したのだろう。彼女はいつそう不機嫌そうな表情を浮かべながら、右側の廊下を顎でしゃくった。

「それなら、この廊下の突き当たりにある左側の部屋よ」

「ありがとうございます」

紀香はすでに反対側の廊下に向かっている女性医師の背中に礼を言い、腕時計を見た。

時刻は、午後二時十二分。

早歩きで進み、教えられた部屋の前に立ってドアをノックする。

「はー」

聞こえてきたのは低い男性の声だ。おそろおそろドアを開けると、ロングデスクに着いている白衣姿の男女がいつせいに紀香を振り返った。その中に川端は見当たらず、長机の上に置かれている書類は受診契約書ではなくカルテだ。どう見ても紀香が目指していた部屋ではなさそうだし、何か

しら大事なミーティングの邪魔をしたことは明らかだった。

せっかくなら教えてもらったけれど、どうやら女性医師は場所を間違えてしまったようだ。

「し、失礼しました。あの、ここは西館六階の第四会議室ではありませんよね？」

そうであるとはぼわかつてはいたが、気まずさについてそんな質問をしてしまった。早々に退散しようとして一歩踏み出していた足を引っ込めた時、ホワイトボードに向き合っていた男性が紀香を振り返った。

「ええ、違いますね。ここは西館六階の第一会議室ですから」

白衣を着た彼は驚くほどスタイルが良く、思わず見惚れてしまうほど眉目秀麗だ。

「あっ……！」

男性と視線が合ったとたん、紀香は大きく目を見開き、口をあぐりと開けて棒立ちになる。

心臓がドクンと跳ね上がり、彼を見つめたまま今にも腰が抜けてへたり込みそうになってしまう。

「どうかしましたか？」

男性が言い、紀香を怪訝そうに見つめ返してくる。

紀香はハツとして我に返り、急いで首を横に振った。

「いえ、あの……」

「第四会議室なら、エレベーターホールを出てまっすぐ進んで、突き当たりの右側にある部屋ですよ」

ドアに一番近い席に座っている看護師らしき女性が、気を利かせて教えてくれた。

紀香は表情を硬くしたまま彼女のほうに向きなおり、ぺこりとお辞儀をした。

「そ、そうですか。お邪魔して申し訳ありませんでした！」

返事をする声が裏返し、後ずさりながらも一度お辞儀をした額がドアの縁に強くぶつかる。

「痛っ……」

ぶつけたところを手でさすりながら顔を上げると、座っている全員が呆れたような表情でプツと噴き出した。

コメディドラマのワンシーンでもあるまいし、いい年をして恥ずかしい！

紀香は顔を赤くしながら改めて謝罪し、下を向いたまま大急ぎでドアを閉めた。そして、実際に声が出ないよう口を手で押さえ、心の中で叫び声を上げる。

(王子さまだ……！ こんなところで、王子さまに会えるなんて……！)

忘れもしない三年前の夏、紀香を痴漢行為から救い出してくれた人――

たった今、ホワイトボードの前に立っていた彼こそ、その時の王子さまに違いなかった！

できるなら、すぐにでも感謝の気持ちを伝えたい。

けれど、今はそうすべき時でないのは言うまでもないし、あれこれ考えるのは肝心の仕事をきちんと終わらせてからだ。

(今は全部、あと！)

紀香はついさつき教えられた部屋に向かって大股で歩き、やつとの思いで本物の第四会議室に行き当たった。

ドアをノックして中に入ると、四帖ほどの広さの部屋の中で川端が一人待っていた。

「川端さん、お待たせいたしました。遅れて申し訳ありません！」

ようやく辿り着いたことに安堵しながら、紀香は川端に平謝りをする。

「いえいえ、電車の遅延なら仕方ないわ。駅から大急ぎで来てくれたのね。まずは、冷たいお茶をどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

示された席に着くなり労われ、お茶を出された。礼を言って一口飲み、最終確認を終えたのちに契約書を取り交わした。

「今日は、ご足労いただきありがとうございます。さて……ちょっと早いけど、三時の休憩を取らない？ そのつもりで、二人分のおやつを用意しておいたの。悪いけど、少しだけ付き合ってくれたら嬉しいわ」

川端がテーブルの端にあるトレイを引き寄せ、載せてあった白い小箱を開いた。中には手のひらサイズの豆大福がふたつ入っている。やるべきことは終わっているし、これくらいなら差し支えないだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて。美味しそうな豆大福ですね。いただいちゃっていいんですか？」

「もちろん」

川端が嬉しそうな顔で、豆大福をひとつ紀香のほうに差し出してくる。それをありがたくいただきながら、彼女のお喋りに耳を傾けた。

「そういえば、ここに来るのに迷ったりしなかった？ エレベーターホールにある案内板、ちょっとわかりにくかったんじゃない？」

「ええ、実は一度間違った部屋のドアをノックしてしまって」

紀香は川端に、エレベーターホールでちょうど行き合った女性医師に会議室の場所を訊ねたこと、その結果なぜか医師たちがミーティングをしている部屋に行きついたことを話した。すると、川端は申し訳なさそうな顔で、ひょいと肩をすくめた。

「女性ドクターが？ その人の身分証は見た？」

「いいえ。でも、シヨートヘアのすごく綺麗な人でした」

「ああ、わかった！ それ、きつと藤沢環奈先生ね。この病院きつての美人で、産婦人科の先生よ。すらすらとして背も高かったんじゃない？」

「はい、確かにすらすらとしてました」

「じゃあ、環奈先生に間違いないわ。でも、なんで間違えて教えちゃったのかしらね？ とにかく、ごめんなさいね。総務には、もっと見やすい案内板に変えるよう再三言っているんだけど、なかなか動いてくれなくて」

川端が両手を合わせ、紀香に向かってすまなそうな顔をする。

「大丈夫です。それより、ちょっとお伺いしたいことがあるんですけど、いいでしょうか？」

川端が豆大福を頬張りながら頷き、紀香は思い切つてミーティングルームで再会した王子さまのことを訊ねた。

「ミーティングルームにいらしたドクターなんですけど、モデルみたいにスタイルがよくて、まるで医療ドラマに出てくるイケメンの俳優さんみたいにかっこいいななんて思っちゃって……」

今日まで何度となく思い返してきた王子さまの顔に、再会した彼の映像が重なる。

紀香の言葉を聞いて、川端が大きく頷きながらパチンと手を合わせた。

「ああ、きつとそれ、脳神経外科の伊坂圭一郎先生だわ。うちの病院ってドクターの顔面偏差値が高いのよね。中でも圭一郎先生は別格で、顔も頭脳も断トツなのよ。八木沢さんが気になるのも当たり前だわ。ふふっ、もしかして一目ぼれしちゃったとか？」

「ええっ？」

詳しい事情は明かさなままだし、ちょっと気になったから——程度のテンションで聞いたつもりだった。けれど、川端は紀香の顔を見てニコニコと微笑み、身を乗り出してきた。

「い、いえ……そんなわけでは……それより、名字が伊坂ってことは……」

「そう。圭一郎先生は伊坂総合病院の創設者一族の一人なの。おまけに脳神経外科医としての手腕はピカ一で、先生に執刀してもらいたがる患者さんは大勢いるわ。要するに圭一郎先生は実力、容姿、家柄のすべてを兼ね備えたスーパーイケメンってわけ」

川端の情報によると、彼は国内最高峰の大学を首席で卒業したほどの秀才で、院内にいる伊坂姓のドクターも全員同じ大学出身とのことだ。

伊坂総合病院に関しては、契約を検討する際にホームページを閲覧し、沿革や医療に関する理念などの情報を得ていた。それによると、病院の設立は昭和二十五年で、医療法人化した現在は首都

圏を中心に五十以上の医療施設を保有する、国内トップクラスの医療グループだ。

王子さまが伊坂総合病院のドクターだっただけでも驚きなのに、その上生まれも育ちも由緒正しい御曹司だったとは……

紀香の度肝を抜かれている様子を見て、川端がさらに身を乗り出してきた。

「だから、この病院には伊坂姓の先生が複数いるの。圭一郎先生に、ひとつ年下で従兄弟の純一先生。そのお父さまの伊坂譲二院長のほかにも何人かいらつしやるから、ここに勤めている者はみんな下の名前で先生呼びをしているのよ。さっきの環奈先生も、そんな感じ」

「そうでしたか。じゃあ、私も仕事でここに来る時は、そうさせていだいたほうがよさそうですね」

契約は結び終えたし、以後のやり取りはメールや電話での対応で事足りるはずだ。加えて、病院の敷地は広大で、脳神経外科は事務局とは別棟にある。今後なんらかの用でここを訪れても、紀香が圭一郎と顔を合わせることはないだろう。

「お喋りついでに話すけど、圭一郎先生って超がつくほどの仕事人間で、それ以外のことにはまるで見聞がないみたいなのよ。だから三十歳の今でも独身だし、噂によれば今のところ特定の女性はいないみたい」

「へえ……」

あんなにハイスペックなのに、恋人がいない？

それを聞いて無意識に微笑んでいたのか、川端に指摘されてしまった。

「あら、やっぱり圭一郎先生のこと気になってるのね。いいんじゃない？ その気があれば、ちよつと頑張ってみたら」

「さ、さすがに無理ですよ。そんなにすごい方が、私みたいな一庶民を相手にするわけがありません」

「わからないわよ。もともと、圭一郎先生には決して人を寄せ付けないオーラがあって、職場の誰とも慣れ合わないし、患者さんとも常に一定の距離を保って接してる感じなのよね。いつもクールで、古参の私ですら笑ったところを見たことがないくらい。だから陰で『冷徹ドクター』なんて言われているのよ」

「冷徹ドクター……ですか」

確かに、ホワイトボードの前に立つ彼の顔は無表情だった。けれど、紀香の知る圭一郎は見ず知らずの女性が痴漢に遭っているのを見過ごせない人だ。仮に彼が冷徹だとしても、正義感があるのは間違いない。

「もちろん、ただのあだ名よ。本当に冷徹な人なら、患者さんからの信頼を得られないでしょうから。それに、医師としてはとびきり優秀で、次期院長は圭一郎先生なんじゃないかって……あ、一応これはオフレコだね」

川端が口の前に人差し指を立てて、ひよいと肩をすくめた。

次々に聞かされる事実、紀香はただただ驚くばかりだ。

「わかりました。次期院長と言われているなんて、圭一郎先生って相当実力がある方なんです」

うね」

「もちろんよ。優秀だから外部からの執刀依頼がしょっちゅうくるし、オベのスケジュールで何カ月も先までスケジュールが埋まりっぱなしなのよ。あれでもう少し愛想がよかつたらねえ……なんて思わないでもないけど、そんな圭一郎先生はちょっと想像つかないかも」

川端が笑い、紀香もそれに合わせてにっこりする。それからすぐにお茶を飲み干し、契約とおやつの札を言って部屋をあとにした。

(中身はどうであれ、外見は三年前と変わらないな。だって、一目見てすぐにわかったもの)

エレベーターホールに向かいながら、さつき見た圭一郎の顔を思い出す。

紀香が彼を王子さまと呼んで何度となく思い出していたのは、それだけに深く残っていたからだ。できることならまた会いたいと思いつけていたし、その気持ちはやがて憧れのようなものになり、いつしか圭一郎が理想の男性になっていた。

むろん、十中八九もう会えないと諦めていたから、やみくもに想いを募らせるようなことはしなかった。けれど、ふと気がつけば圭一郎のことを考え、もう一度会わせてほしいと天に向かつて願ったりしていた。

(まさか、あれほど由緒正しい生まれのエリートドクターだったなんて……どのみち、私なんかの手が届く人じゃなかったってことか)

天は二物を与えずというが、圭一郎は例外中の例外だ。

それに比べて、紀香はどこにでもいるごく普通の二十代女性で、特別美人でもなければスタイル

がいいわけでもない。髪は前髪ありのミディアムヘアで、おしゃれは嫌いではないけれど、着るのはシンプルで色柄も大人しめの洋服が多い。服装の傾向が変わったのは痴漢に遭ったのがきっかけであり、ストーカー被害でさらに地味になった。

(前はもつと明るい色の洋服を着ていたんだけどな。おかげで友達から二三歳老けて見えるとか言われちゃってるし)

紀香は元来明るくはつらつとしており、めったなことでは落ち込んだりしない性格だ。

そんな紀香でも、さすがに過去の辛い思い出はトラウマになっている。そのせいで、心身に影響が出たりしているが、幸い生まれ持った性質は変わっていない。

多少落ち込むことがあっても、常に前向きでいられるのはそのおかげだ。

電子音が鳴り、エレベーターのドアが開く。誰もいない中に乗り込み、ドアがゆっくりと閉まるのを見ながら、長い溜息をつく。

(せっかく王子さまと再会したんだもの。ちょっとくらい夢を見たかったなあ)

身分差のある二人が恋人同士になるなんて、所詮映画やドラマの中だけの話だ。頭を切り替えて腕時計に視線を移そうとした時、閉じかけていたドアが開き、白衣の男性がエレベーターに走り込んできた。

「ああ、失敬」

反射的に顔を上げると、乗り込んできたのは伊坂圭一郎だった。

「え……えええっ?」

驚きつつもとっさに後ずさったが、勢い余って止まれずにいる彼と正面からぶつかりそうになる。すんでのところで伊坂が壁に片手をつき、事なきを得た。

けれど、無意識にのけぞった身体が後ろに倒れ、背後の壁に後頭部を打ち付けてしまった。

「いっ……」

一度ならず二度までも！

紀香は鈍く広がる痛みをこらえ、足を踏ん張って体勢を整えた。しかし、そのせいで圭一郎の胸元に顔をこすりつけそうになり、再びドンと音を立てて壁にもたれかかる。直後、圭一郎が一步下がって軽く頭を下げた。

「誰も乗っていないと思つたものだから……申し訳ありません。ぶつけたところは大丈夫ですか？」

紀香と圭一郎の身長差は、パッと見ただけで三十センチ近くある。彼は紀香の顔を窺うように腰を落とし、目をじつと見つめてきた。

「は、はいっ！ 大丈夫です」

近距離から覗き込まれ、心臓が喉元までせり上がる。見開いたままの目を閉じられずにいると、圭一郎がふと目を細め、訝いぶかしげな表情を浮かべた。

「あ、すみません。私、流星銀行健康保険組合の八木沢と申します。先ほどは失礼しました。今日は、健康診断の件でお邪魔させていただきました。つい今しがた契約を済ませたところです」

急いでバッグを探っていると、彼も胸ポケットから名刺入れを取り出した。緊張のせいで多少指が震えたが、どうにか彼と名刺を交換する。

伊坂総合病院 脳神経外科 伊坂圭一郎。

紀香は手の中の名刺をまじまじと見つめ、彼と面と向かって話している感動に浸ひたった。

「間違っていたら申し訳ないし変に誤解しないでほしいんですが、もしかして何年か前に僕と一度会ったことがあるのではないですか？」

圭一郎に問われて、紀香は顔を上げてぱあっと表情を明るくした。そして、大きく頷きながら、満面の笑みを浮かべる。

「ええ、あります！ 三年前の夏、電車で痴漢に遭った私を助けてくださいましたよね？」

「ああ、やはりそうでしたか」

「覚えていてくださったんですね。あの時は、きちんとお礼も言わず大変失礼しました。気がついた時には、もういらつしやらなくて……ずっとお礼を言いたかったので、お会いできて本当に良かったです」

弾んだ声で返事をする、彼は頷きながらエレベーターの文字盤に向き直った。

「いえ、礼を言われるほどのことではありません」

「そんなことないです。本当に助かりましたし、いくら感謝しても足りないくらいです」

「当然のことでした。会ったことがあるかと聞いたのは、あの時のあなたが、かなりショックを受けている様子だったので、あのあと何かしら心因性の不調が出なければいいなと考えたことを思い出したからです」

てつきり忘れられているかと思っていたのに、彼はちゃんと覚えてくれていた上に、その後の心配までしてくれていたのだ。

「確かに、ものすごくショックを受けましたけど、助けていただいたおかげで日常生活は普通に送れています。でも、いまだに電車のドア付近には立たないようになっていますし、立とうとも思いません」

エレベーターがノンストップのまま三階に到着し、圭一郎がドアの外に出る。積みもり積もった感謝の気持ちをまだ伝えきれしていないし、もしかしてこれが最後のチャンスかもしれない。

紀香はとっさに彼を追ってエレベーターを降りて、彼の背中に声をかけた。

「あの——」

呼びかける声に圭一郎が立ち止まり、振り返って紀香を見た。彼の顔は無表情だが、心なしか迷惑そうな色が浮かんでいる。

「まだ何か？」

圭一郎の声は冷ややかで、喉元まで出かかった声ですつと引つ込んだ。それでもなんとか気持ちを奮い立たせ、おずおずと口を開く。

「……本当に、ありがとうございます。それだけ、どうしても伝えたくて」

しばらくの間、紀香を見つめていた圭一郎が、僅かに頷いた。

「わかりました。では」

言い終えるなり、圭一郎が前を向いて歩き出した。

もうこれきり会えないかもしれない——

そう思うと、切なさが胸が痛む。けれど、再会してきちんと礼を言えただけでもよかった。

紀香が瞬きもせず彼の背中を見送っていると、遠ざかる圭一郎のポケットからスマートフォンに着信音が聞こえてきた。取り出したスマートフォンの画面を見た圭一郎が、短く溜息をついたあと受電ボタンをタップする。

「はー」

『どこにいるの？ 約束の時間は過ぎているわよ』

あからさまに不機嫌そうな声で応答した彼が、顔をしかめてスマートフォンを耳から遠ざけた。必要があつて音量を大きくしていたのか、先方の声が紀香のところまで聞こえてきている。

「今、行こうとしていたところです。ミーティングが少し長引いたもので——」

『あら、そう。逃げ出そうとしていたんじゃないなら、いいわ。じゃ、待っているわね。今度こそ用意した見合い写真に全部目を通してもらいますからね』

再び溜息をついた圭一郎が「では、のちほど」と言つて通話を終了させる。彼は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、いかにも行きたくなさそうに天井を仰いだ。

聞こえてきた声は年配の女性のものだったが、とてもはつらつとしていた。それはさておき、話の内容が大いに気にかかった。

(え……今、見合い写真って言つたよね?)

そんな話をするくらいだから、電話をかけてきたのは彼の親戚か何かだろうか。

紀香がまだいたことに気づいた圭一郎が、黙ったままじっと見つめてくる。目が合い、気まずい沈黙が流れた。わざとではないにしろ、彼のプライベートな話を聞いてしまったのだ。

紀香は申し訳なきでいたたまれなくなり、彼に向かって深々と頭を下げた。

「お急ぎのところ、お邪魔してすみませんでした。では、私はこれで失礼します」

紀香は下を向いたまま向きを変えて、エレベーターホールに急いだ。すでにエレベーターは一階まで降りており、乗降者がいるのかなかなか昇ってこない。チャリと振り返ると、圭一郎はまだ同じ場所において、こちらに背中を向けて立っている。

エレベーターが来るまでに、もう少しかかりそう。

そう判断した紀香は、左方向に見えている階段のマークを指して歩き出した。大股で廊下を進み、階段を急ぎ足で下り始める。ちょうど一階に続く踊り場に到着した時、上から聞こえてきた声に呼び止められた。

「すみません、伊坂です。ちょっと待ってください」

声に続き、彼が階段を駆け下りてくる音が聞こえてきた。急いではいるがバタバタと慌てているわけではないし、壁に反響して響く足音はとてもリズムカルだ。

イケメン御曹司は急ぎ足の音までスタイリッシュであるらしい——そんなことを思いながら階段を上り、二階についたところで彼とはちあわせた。

「申し訳ないんですが、少しだけお時間をいただけませんか？」

「は、はいっ」

ふたつ返事で承知し、圭一郎に案内されるままに五階フロアに戻って廊下の途中にある小会議室に入る。

そこはさつきまでいた第四会議室と同じ造りで、あるのはホワイトボードのほかにはロングデスクと椅子だけ。圭一郎は中に入るなり紀香を振り返り、入口から近い椅子に座るよう促してきた。

「先ほど、いくら感謝しても足りないくらいだと言いましたね？ それなら、僕の頼みを聞いてくれませんか？」

彼の声は静かだが、紀香にそうしてほしいと強く望んでいることだけはわかった。

王子さまの頼みを断れるはずもなく、紀香は「はい」と返事をする前に深く頷いた。

「よかった。ちなみに、今あなたに恋人はいますか？」

予想外の質問に戸惑いながらも、きつぱりと首を横に振る。

「いえ、もう何年もいません」

「そうですか。では、とりあえず僕と一緒に来て話を合わせてください。たぶん、十分もあれば終わります。急いでいるので、説明は後できちんとしていますので」

「わ、わかりました」

契約先の医師の頼みだし、用事が済んだ後とはいえ十分なら許容範囲だ。彼とともに小会議室を出て、エレベーターに乗り込む。中にいた医師がエレベーターを降り、二人きりで八階に到着する。廊下を早足で進み、マホガニー色のドアの前で立ち止まった。金属製のルームプレートには「会長

室」と書かれている。

「え？」

思わず声が出て、慌てて口をつぐむ。その間に、圭一郎が部屋のドアをノックし、中から「どうぞ」と返事があった。彼の背後に隠れるようにしつつ開いたドアの向こうを見ると、窓側にある応接セットの二人掛けソファに白髪の女性が座っている。

（わあ、伊坂瞳会長だ！）

伊坂瞳は、五年前に亡くなった彼女の夫である伊坂誠の跡を継いで、会長に就任した。彼女は有名な華道家で、時折テレビや雑誌で顔を見かける文化人でもある。

まさか彼女と対面するなんて思いもしなかったが、病院のホームページを隅々まで見たおかげで会長の経歴はしっかりと頭に入っていた。

「遅れてすみません。会長は、この後は外出される予定ですよ？ 僕も予定が立て込んでいますので、僕のほうから用件のみ伝えさせていただきます。」

圭一郎が先にそう申し出ると、瞳は頷いて自分の前の席に座るよう促した。そして、彼の斜め後ろに控えている紀香を見て小さく首を傾げた。

さすが華道を極めている人だけあって、その様子は実に優雅だ。

「ええ、わかったわ」

圭一郎とともに応接セットに近づき、彼に勧められて二人掛けのソファの左側に腰を下ろす。その隣に圭一郎が座る間も、瞳の視線は並ぶ二つの顔をせわしなく行ったり来たりしていた。

とりあえず、名刺を出して自己紹介すべきだろうか？

バッグの金具に手を置いて圭一郎を見ると、紀香の考えを肯定するように浅く頷いた。

「はじめまして。八木沢紀香と申します」

「はじめまして。伊坂瞳です」

瞳が差し出した名刺には特殊加工がされており、キルト生地のように凹凸がある紙面を囲むように桜の花びらがちりばめられている。

「八木沢さんは、流星銀行の健康保険組合にお勤めなのね。今日は、お仕事でうちにいらしたの？」

「はい。先ほど、医事課の方にお会いして、当行の健康診断委託契約の締結手続きを済ませてきました」

「それで、せっかくだから一度彼女を会長にご紹介しておこうと思いましたが」

そう話す圭一郎が紀香のほうに顔を向けて、にっこりと微笑みかけてきた。

向けられた笑顔が思いのほか魅力的で、紀香は心臓を射貫かれたようになる。

「いったい、これから何が始まるのか――」

紀香がそう思った時、圭一郎がおもむろに紀香のほうに身を寄せると、膝の上で重ねている手に左の掌を重ね、ギュッと強く握りしめてきた。

「会長、僕から改めて紹介させていただきます。こちらの八木沢紀香さんは、僕の婚約者です」

「まあ、そうなの？」

瞳が驚いたような声を上げて紀香のほうに向き直った。

『とりあえず、僕と一緒に来て話を合わせてください』

まさかの展開に仰天しながらも、紀香は先ほどの圭一郎の言葉を思い出し、こつくりと頷いて口元にぎこちない笑みを浮かべた。

「だから、私が持ち込むお見合いの話を全部断ってきたのね。圭一郎ったら……いい人がいるならいると、早くそう言ってくれたらよかったのに」

「すみません。彼女にきちんとプロポーズをして、承諾してもらってから紹介しようと思っていたので」

「そうだったのね。それにしたって、ちよつとくらい話してくれたってよかったのに」

「まだ、付き合つて半年ですし、プロポーズを受けてもらったのもつい先日でしたから」

「あら、そう。もしかして、真っ先に私に知らせてくれたの？」

「はい。この件に関しては、会長が一番気にかけてくださっていたので」

圭一郎の言葉に気をよくしたのか、瞳が嬉しそうに眉尻を下げた。

「とにかく、喜ばしいことになりわね。ああ、びっくりして喉が渴いたわ。紀香さん、紅茶でもいかが？ 圭一郎も飲むでしょう？」

瞳がホツとした表情を浮かべながら、ソファから立ち上がった。

圭一郎の左掌は依然として紀香の重ねた手の上に乗せられたままで、紀香はどう返事をしていいかわからずに彼のほうに視線を向けた。

「紀香さん、せっかくだからいただきますでしょうか？」

「はい……」

それからすぐに瞳が紅茶を出してくれたが、口をつける前に圭一郎の胸ポケットの中から無機質な電子音が聞こえてきた。

「ちよつと失礼」

圭一郎が立ち上がり、ポケットから取り出したスマートフォンを耳に当てて部屋を出ていく。

取り残された紀香は、それまで以上に緊張しながら紅茶のカップに手を伸ばした。

「いただきます」

「どうぞ、召し上がれ。ふふっ、八木沢さん、緊張してるでしょう？」

瞳がソファから立ち上がり、紀香の隣に移動してきた。彼女の目鼻立ちのはつきりとしており、老齡ではあるけれど肌の色つやもよく美人だ。

「圭一郎のことだから、きつと急にここに連れてこられたんじゃない？ 八木沢さん……いえ、婚約者なら私も紀香さんと呼んでいいかしら？」

瞳に優しく訊ねられ、紀香は即座に頷いて口の中に含んだ紅茶を飲み下した。

「もちろんです」

「そう？ じゃあ、紀香さん。いくつかお聞きしてもいいかしら？」

「は……はい、どうぞ」

紀香は、瞳に聞かれるまま質問に答えた。年齢や出身地にはじまり、現住所や実家の所在地のほか、両親は今何をしているかなど、かなり突っ込んだことまで訊ねられる。

「あら、そう。お母さまは和菓子屋にお勤めなのね。私、甘いものが好きだけど洋菓子より和菓子のほうが好みなの」

「では、ぜひ一度『姫野庵』の練切りを食べてみてください。町中の小さなお店ですが、味は有名店のものにも引けを取りませんから」

同店は創業七十四年で、紀香の母親はもう二十年近くそこに勤めている。実家の家族は揃って甘党で、紀香も幼いころから姫野庵の和菓子に親しんできた。

「ぜひ食べてみたいわ。よければ、店の場所を教えてください？」

忙しい日々を送っている瞳だが、今でも自宅で昔から開いている華道教室を続けているのだという。通ってくるのは皆長年の生徒で、教室が終わった後はいつも、お茶と和菓子でお喋りを楽しむらしい。

瞳は意外にも話しやすく、調子に乗ってついべらべらと聞かれもしないことを喋ってしまった。

だが、華道の大家に姫野庵の和菓子に興味を持ってもらえたのは嬉しかった。

「それとね、一応言っておくけど、私は圭一郎が本気で結婚したいと思う相手なら誰でも無条件で受け入れるつもりよ。それだけ圭一郎を信頼しているし、私も華道家としてたくさんの人と接してきたから、人を見る目には自信があるの。今、お話をただだけでもわかる……紀香さん、あなたはとても素敵なひとだわ」

権威ある病院の会長にそう言われて、素直に嬉しかった。しかし、その一方で嘘をついている罪悪感にチクチクと胸が痛む。

「圭一郎には幸せになってほしいの。紀香さんも聞いているかしら？ 両親を早くに亡くしてから圭一郎は、とても孤独だったのよ」

「は……はい……」

「私がつとと一緒にいてやればよかったのに、忙しさにかまけて圭一郎の養育を、あの子の叔父夫婦に任せきりにしてしまって……本当に可哀想なことをしたわ。だから、圭一郎には一日でも早く結婚して温かい家庭を築いてもらいたいの。紀香さん、あの子を幸せにしてやってちょうだい。お願い……このとおりよ」

瞳が紀香に向かって拝むようなしぐさをする。

紀香は慌てて、彼女の手を取ってギュッと強く握りしめた。

「わかりました。私が必ず圭一郎先生を幸せにします」

「本当に？ 約束してくれる？」

「もちろんです」

「ああ、よかった……。これで私も一安心できるわ」

紀香の答えを聞いた瞳の顔が明るくなった。

今聞いた話だけでも、圭一郎の生い立ちが決して幸せに包まれたものではなかったことがわかる。できもしない約束だとわかつてはいるけれど、ここは請け負っておくしかない。

それからすぐに圭一郎が部屋に戻ってきて、孫の顔を見る瞳が一層晴れやかな表情を浮かべた。

「すみません。頼んでいた検査結果の報告が来たもので」

「いいのよ。おかげで紀香さんと二人きりでお話ができてよかったわ。さあ、私はもう行かなくちゃ。圭一郎、いい人に出会えてよかったわね。本当に嬉しいわ。つてことで、これはもう必要ないわね」

瞳がテーブルの端に置いてあった大判の台紙の束を掌でポンと叩いた。それらはきつと瞳が圭一郎のために用意した見合い写真だろう。

彼女がソファから立ち上がるのに合わせて、紀香も素早く腰を上げてかしまった。

「紀香さん、じゃあまたね。圭一郎をくれぐれも、よろしくお願いします」

「はい。こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします！」

瞳に頭を下げられ、紀香は恐縮しながら深々と礼をした。彼女が軽い足取りで部屋を出ていく。

ドアが閉まるなり、入口で瞳を見送っていた圭一郎が紀香を振り返った。

「会長の様子からして、とても上手く話を合わせていただいたみたいですね。お聞きになったとは思いますが、僕は日頃から会長に見合いを勧められていて、いい加減うんざりしていたんです。それを止めさせるための嘘に付き合わせてしまって、すみませんでした」

圭一郎に詫びられ、紀香は恐縮して後ずさった。そう話す彼の顔は無表情で、瞳と話していた時のような微笑みはかけらほども残っていない。

「いえ、私は会長に話を合わせていただけで……お役に立てたなら何よりです。ですが、結果的に会長を騙すことになってしまったことが申し訳なくて——」

「会長には、時期を見て八木沢さんとは別れたと言うつもりです。もちろん、妥当な理由をつけて話しますし、八木沢さんには決してご迷惑をかけることはありませんので、ご安心ください」

「はい、わかりました」

もしそうであっても、瞳に対する罪悪感は消えない。

紀香は元来嘘が嫌いだし、たとえ冗談であっても人を騙すようなことは口にしないようにしている。だが今回は頼まれて仕方なくやったことだし、すべては圭一郎に恩を返すためだ。

「とにかく、この件に関してはこれで終わりです。どうも、お疲れさまでした」

ドアを開けられ、掌で外に出るよう促される。圭一郎のしぐさは丁寧で品があるが、決して温かくはないし、むしろ決して人を寄せ付けない冷たさがある。

有無を言わず部屋の外に出され、三步前に進んだところでゆっくりと振り返った。

けれど、ドアはもうすでにびったりと閉じられており、辺りはシンと静まり返っている。

紀香はエレベーターホールに向かいながら、キツネにつままれたような表情を浮かべた。

(今あったことって、全部現実だよな?)

王子さまとの奇跡の再会を果たした後、怒涛の展開で彼の嘘の婚約者にさせられた。とにかく驚きの連続だったが、圭一郎にきちんと礼を言えし、多少なりとも恩を返せたのはよかった。

彼の輝かしい人生において、自分はただチャット通りすがっただけのモブキャラだ。

それでも紀香にとって圭一郎は王子さまであり、それはきつとこの先も変わらない。

誰もいないエレベーターに乗り込んで地上に向かいながら、紀香は心の中で今一度圭一郎に感謝した。



流星銀行の本社は都心にあり、周りには様々な企業のビルが立ち並んでいる。

設立は昭和二十四年で、現在は地方銀行業界において経常収益ランキング十五位以内を維持する中堅行へと成長していた。

紀香のいる健康保険組合は八階建ての本社ビルの五階にあり、社員の診療などに関わる個人データを扱っている関係上、常に施錠された空間になっている。

組合は事業主と社員の代表によって運営されており、最高責任者である理事長は流星銀行の副頭取が兼務しているが、顔を合わせるのは会議の時くらいだ。部屋の中にいるのは上司である常務理事と事務長のほかに、男女の主任が一人ずつ。加えて、紀香を含めた二人の一般行員がいる。

皆、おおむね常識的な人たちで、職場環境は良好でとても働きやすい。

同僚たちは、おそらく紀香が転勤になった理由は聞いていたはずだ。だが、それについて陰口を叩いたり興味本位で探りを入れたりしてくる人がいなかったのには救われたし、そんな環境を作ってくれた同僚たちには感謝しかない。

（転勤させてもらって本当によかったな。本当はもう少し窓口業務を担当したかったけど、今の仕事も十分やり甲斐があるもの）

紀香は大学で栄養学を修め、管理栄養士の資格を取得している。卒業後も本来なら資格を活かし

た職業に就きたいと思っていたけれど、管理栄養士の募集は決して多くなかった。それに、あれこれと選り好みができるほど就職活動は甘くない。

結局現実的な選択をせざるを得なくなり、数々の入社試験と面接を経て、ようやく流星銀行に入行することができたのだ。

そして今、きっかけはさておき、同行の健康保険組合に所属して多少なりとも資格を活かせそうな部署にいられることを嬉しく思っている。

（それもこれも、巡り合わせなのかな。……だとしたら、王子さまとの再会もそうだよね）

圭一郎と再会した週の金曜日、紀香はランチタイムを終えて化粧室に寄った。手を洗いながらぼんやりとそんなことを考え、ふと視線を上げて鏡を見ると、いつもの見慣れた顔が映っている。

（王子さまは、外見も中身も本当の意味で王子さまだったんだなあ。それに比べて、私は筋金入りの庶民だし、すべてにおいて格が違っただけだ）

伊坂圭一郎は容姿が優れているだけではなく、頭脳明晰で優秀な名医だ。その上、育ちの良さがちよつとした動作に現れている。

（名家の生まれだし、なんてだったって伊坂瞳会長のお孫さんだものね。いかにもきちんとして感ぜられた感じだったし、紳士っていうのはあんな人のことを言うんだらうな）

圭一郎と再会してからというもの、紀香は暇さえあれば彼のことを思い浮かべている。

再び巡り合った王子さまは破格にハイスペックで、再会は実にドラマチックだった。

今思い返しても信じられないような展開で、すべてがバタバタとすぎた。

(本当は嘘なんかつきたくなかったんだけどな。でも、圭一郎先生のためだもの。それに、もう私が出る幕はないよね)

いくら仕事上で圭一郎のいる病院と関わったとしても、自分は平凡な一銀行員で、彼は日本屈指の医療グループの御曹司だ。本来ならプライベートで接点など持つことができない人だし、おそろくもう会うこともないだろう。

(もつと恩返しをしたかったな。でも、よく考えてみたら、あんなに素敵な人に何をどう返すつもりだったの？ 彼ほどの人なら、欲しいものは何もかも手に入れていそうなもの)

何はともあれ、また会えてよかった。

優しさと冷たさ。笑顔と無表情。圭一郎の普段見られないであろう一面を見たからか、密かに憧れ続けていた想いがより募ったのは事実だ。

しかし、これから先あれ以上のハプニングは起こらないはず。それでも、彼と関わった時間は、きつとこの先ずつと記憶の中に残り続けるに違いない。

そんなふうにいるながら席に戻り、やりかけの仕事をこなすべくパソコンを起動させる。今取りかかっているのは、医療機関から送られてきたレセプトと呼ばれる診療報酬明細書のチェック業務だ。毎月四桁を下らないレセプトは、各医療機関から社会保険診療報酬支払基金を介して各健康保険組合に送られてくる。

業務に当たるのは、主任以下の行員四人。チェックソフトの導入により事務作業量はかなり軽減されているが、最終的な判断を下すのは担当者だ。

紀香たちは、その責任を果たすために外部の勉強会や研修などに参加しており、伊坂総合病院の川端と知り合ったのもそれがきっかけだった。

予定していたチェックを終え、返礼処理の準備をした後で、一息入れるために席を立つ。デスクを離れようとした時、内線を受けたひとつ年下の同僚の山岡鈴香が紀香に向かって手を振ってきた。彼女とは本社に転勤してからの付き合いだが、馬が合ってプライベートでも仲良くしている。

「紀ちゃん、受付に伊坂総合病院の伊坂瞳会長がいらっしゃってるそうよ」

「え？」

(なんで瞳さんがここに?)

紀香は目を剥いて立ち止まり、すぐに一階の受付に向かった。

彼女は受付カウンターの横に立ち、優雅にあたりを見回している。一階にはATMコーナーのほかに椅子とテーブルが置かれた小さな休憩所が設けてあり、居合わせた何人かの人が瞳を見て足を止めていた。

「伊坂会長、お待ちせいたしました」

紀香が声をかけると、瞳がにこやかな顔で小さく手を振る。今日の彼女は、落ち着いた若竹色の着物姿だ。

「突然来てごめんなさい。たまたま近くのビルでいけばなの展示会があつてね。先だつてはうちの病院と健康診断委託の契約をしたでしょう？ せっかくだから、職場の皆さんに挨拶をしようと

思っ」

「そうでしたか」

突然の来訪に面食らいながらも、紀香は瞳とともにエレベーターに乗り込み、彼女を健康保険組合に案内した。迎えた常務理事の田中たなかと事務長の村下むらしたが腰を低くして瞳に挨拶をして、部屋の一角にある応接セットに誘導する。

ほかに健康診断の委託契約をした医療機関はあるが、そのトップがわざわざ訪ねてくるなんてほぼあり得ない話だ。いったいどんな用件があつてのことだろう？

小さな病院ならいざ知らず、相手は日本屈指の医療グループの会長だ。

もしかして、契約に関して何かしら問題があつたのでは――

そんなふうに見えるのか、瞳の前に並んで腰を下ろした二人は、彼女の様子を窺うように愛想笑いを浮かべている。

鈴香が三人にお茶を出し、紀香はそのタイミングで礼をして応接セットから少し離れた位置にあるキャビネットの前に立つ。仕事に取りかかりながらも、瞳のことが気になって、つつい会話に聞き耳を立ててしまう。

「お忙しいところ、お邪魔して申し訳ありません。今日はたまたま近くに来たものですから、ちよつとご挨拶をしようと思つて伺わせていただきましたの」

瞳が紀香にしたのと同じ説明をすると、田中たちの顔に安堵の色が浮かんだ。少しの間、二人と健康診断に関する話をした後、瞳が出されたお茶を一口飲んで紀香のほうに顔を向けた。そして、

にこやかな笑みを浮かべながら田中たちに向き直つた。

「紀香さん、こちらはとても雰囲気の良い職場ね。来てみて安心したわ。紀香さんは、うちの将来を担う後継者、伊坂圭一郎の婚約者ですもの。田中常務理事、村下事務長、それにほかの皆さんも、紀香さんをくれぐれもよろしくお願いしますね」

「えっ!？」

田中たちがそろつて声を上げ、話を聞いていたほかの者たちともども紀香を見た。

視線を注がれた紀香は、どう反応していいのかわからずに頬を引きつらせる。

「あら、もしかして圭一郎との婚約の件は、まだ言つていなかったのかしら？ まあ……ごめんなさい。私つたら、先走つてしまったみたいで――」

「いえいえ……それは大変おめでたいことですね。なるほど、そうでしたか」

「八木沢さんはとても優秀な社員ですし、管理栄養士の資格も持つっていると聞いていますから、今後はそちらの方面でも活躍してもらおうと考えていたところで――ねえ、常務理事」

村下が言い、田中がうんうんと頷く。

「あら、それはいいわね。ぜひ、そうしてくださいね。では、今日は突然やってきたにもかかわらず、お時間をとつていただいてありがとうございます」

瞳が席を立ち、紀香は必然的に彼女を見送る役割を任された。

圭一郎に頼まれてついた嘘が、職場に飛び火した！

瞳とともにエレベーターで一階に向かいながらも、紀香は気が気ではなかった。詳しい事情は話

せないにしろ、一刻も早く婚約の件は事実ではないと皆に弁明しなければ。けれど、わざわざ足を運んでくれた瞳を放り出すわけにはいかなかった。

「私ったら、圭一郎との婚約の件は、もう公おおびにしていると思込んでしまっ……プロポーズが済んでいるとはいえ、お付き合いを始めて半年ですものね。ごめんなさいね、紀香さん」

「いえ、大丈夫です。どうか、お気になさらないでください」

本当は全然大丈夫ではないが、嘘を信じている瞳を責められない。

紀香は精一杯の笑顔を張り付けた。途中で乗り込んできた男性社員が、瞳を見て驚きの表情を浮かべる。エレベーターが一階に到着し、彼女は愛想よく彼に会釈えいせきをして先に降りるよう促した。

「紀香さん、管理栄養士の資格を持っているなんて、素敵ね。私は料理がまるでだめで、毎日の食事はお手伝いさんに任せきりなの。付き合って半年ならもうわかってるだろうけど、圭一郎ったら食に無頓着すぎて日頃から心配していたのよ」

瞳の話では、圭一郎は食事をエネルギーの補給としか捉えていないようで、腹が満たされるならなんでもいというスタンスであるらしい。一人暮らしだが当然自炊している様子はないし、日々買ってきたものを適当に食べ、気が向けば外食をする程度であるようだ。

「エネルギーチャージさえできたらいいとか言っ、忙しい時は栄養補給食品みたいなものを食事代わりにしているそうだし、今に倒れるんじゃないかって心配していたのよ。でも、紀香さんがそばにいてくれるからもう安心だわ」

「は、はあ……」

圭一郎は「これで終わり」だと言っていたが、全然終わってない！

ここで話を合わせていいものかどうか……

困り顔をしているのに気づいたのか、瞳が歩く足を止めて紀香に向き直り、手をギュッと握ってきた。

「もちろん、できる範囲でいいの。今は女性だけがキッチンに立つ時代じゃないし、おうちデートと一緒にご飯を食べる時とか、そういうので……私、あの子に美味しいものを食べる喜びを知ってほしいのよ。紀香さん、圭一郎にそれを教えてやってくれる？」

瞳に懇願されて、紀香は「はい」と言わざるを得なかった。さらに念を押されて、瞳が望むままに彼女と指切りげんまんをする。

「ふふっ、子供っぽいことをさせてごめんなさいね。でも、私ではどうにもできなくて、ずっと悩んでいたの。本当に、ありがとう。恩に着るわ」

手をもう一度ギュッと握られて、感謝を込めた目で見つめられる。

瞳の切実な気持ちを感じて、紀香は微笑んで彼女の手を握り返した。紀香を見る瞳が、晴れやかな笑みを浮かべながら目を潤ませる。

「あなたって、本当にいい娘さんね。きっと、ご両親も素敵なたちなんでしょうね。近いうちに、一度お会いしたいわ。ね、紀香さん」

優しい顔でそう問われて、笑いつつ内心で目を剥く。

冗談じゃない！

ただでさえ職場の人たちを巻き込んでしまっているのに、身内まで嘘の輪の中に引き入れるなんて絶対にだめだ。けれど、とりあえず今は話を合わせておく以外に選択肢はなかった。

「私、二人の息子に恵まれたけど、本当は女の子も欲しかったの。息子たちは二人とも結婚したけど、孫は男の子だけでしよう？ だから、紀香さんのような義理の孫ができることがとても嬉しいの。……なんて、変なことを言っでごめんなさい。でも、紀香さんを歓迎しているのだけは忘れないでね」

瞳が申し訳なさそうな顔をして紀香を見る。もちろん、彼女に悪気はないのはわかるし、歓迎してくれる気持ちは嬉しかった。

「はい、ありがとうございます。瞳さんにそう言っていただけなんて光栄です」

紀香が頷くと、瞳はホツとしたように表情を緩めた。そして、何かしら思いついたのかポンと音を立てて掌を合わせた。

「そういえば、個人的な連絡先を交換していなかったわね。それと、会長つて呼ぶのは仕事の時だけにして、普段は瞳さんと呼んでちょうだいね」

瞳が手慣れた様子でスマートフォンを操作し、紀香は彼女に言われるままに電話番号とSNSのアカウントの交換を済ませた。登録名は「伊坂会長」ではなく「瞳さん」だ。

機嫌よさそうに帰っていく瞳をエントランスで見送り、速攻で部署に戻る。すると、懸念していたとおり、上司や同僚たちは破格の玉の輿話に騒然となっていた。

「紀ちゃんったら、いつの間にミラクル級の御曹司をゲットしたの？ 秘密にしていたなんて、水

臭いわよ〜」

鈴香が興奮気味に紀香に詰め寄り、背中をバンと叩いてきた。紀香を囲むほかの四人も、興味深そうな視線を投げかけてくる。

「ご、ごめん！ なんだか急にトントン拍子に話が進んじやったもんだから——」

紀香は手をすり合わせて鈴香に詫言った。後ろめたさはあるが、言っていることに嘘はない。

「なんにせよ、どうやって御曹司のハートを射止めたのか、今後の婚活ためにもぜひ聞かせてもらわないと。山岡ちゃん、今夜あたり八木沢ちゃんを連れて飲みに行かない？」

女性主任の森川が訊ねると、鈴香がふたつ返事で同意する。

飲めば根掘り葉掘り聞かれるし、そうなるとう嘘をつき通すための嘘を重ねることになってしまう。あいにく先約があると言っでなんとか断ったが、先が思いやられる……

どうにか婚約の話はここの話にしてもらおうとしたけれど、時すでに遅し。瞳を見かけた他部署に人がいち早く探りを入れてきたらしく、もうすでに紀香の婚約話は本社全体に広がりつつあった。

（本当は婚約なんてしてないんだってば！ もう、どうしたらいいの？）

圭一郎に頼まれ、これも恩返しのうちだと納得して引き受けた話だ。それに、瞳が絡んでいるだけに、真つ向から否定するわけにはいかなかった。結局、曖昧に話を濁したり笑っでごまかしたりするくらいしかできず、精神的に疲労困憊しながら週末を迎えた。

「疲れた……」

いつ何時、婚約について聞かれるかわからない日々を過ごし、ようやく一人きりでいられる休日になった。

土曜日の今日は特に予定はなく、朝はゆっくり起きて身支度を整える。

(荷物、いい加減に整理しなきゃな)

引越してきてまだ一週間の部屋はがらんとしたままで、運び込んだ段ボールがいくつか放置されたままになっている。前に住んでいたマンションでは実家から運び込んだ家具を使っていた。けれど、今回の引越しを機に大型家具の買い替えをして、明日の午前中に届くことになっている。

「ここはセキュリティもしっかりしているし、今度こそ安心して住めそうだな」

紀香は吹き、小物が詰まった段ボール箱をポンと叩いた。

就職して一年目の夏に電車で痴漢に遭遇した紀香だが、その一年半後に銀行の男性顧客からストーカー被害に遭っていた。

男は支店の近所にある飲食店の経営者で、はじめて顔を合わせたのは彼が紀香のいる窓口へ振込依頼に来た時のことだ。

以後、彼は頻繁に支店を訪れて紀香に支払いや入金処理を頼むようになり、多い時は一日に何度も窓口によつてきた。さらには通勤時に駅で待ち伏せをされたり、ランチタイムに訪れた食堂で声をかけられたりしたこともある。さすがに怖くなって上司に相談したところ、彼が窓口に来た際は別の者が対応することになった。

それで終わるかと思いきや、男の行動はどんどんエスカレートして、最終的に紀香の私生活まで

脅かすようになってしまったのだ。

ただでさえ痴漢男のせいで男性と距離を置くようになっていたのに、ストーカー被害に遭つたのをきっかけに男性不信に陥った。

前に住んでいたのは駅から徒歩十二分の新築アパートで、人通りが多い商店街のそばにあった。

その上、交番がすぐ近くにあり、不動産屋の担当者から独身女性にはお勧めの物件だと紹介された。しかし、いざ住んでみると、少し先に夜遅くまでやっている飲食店が多くあり、酔っぱらいの怒鳴り声がしょっちゅう聞こえてくる。しかも、頼りになるはずの交番は警官の不在が多く、「巡回中」の札が立っているばかりだった。

本当は実家から通えたらいいのだが、本社だと通勤に二時間近くかかる。

紀香は結局賃貸契約の更新をせずに再度新居探しをして、セキュリティ完備のここに落ち着くことに決めたのだ。

(あーあ、圭一郎先生との婚約が本当だったらな。だって先生は私の王子さまだもの。先生と一緒に何も怖くない……でも、ドキドキして落ち着いて暮らせないかも？ なぁんて、そんなことあるわけないでしょ)

勝手に盛り上がって、自虐的にフンと鼻を鳴らす。

腫の介入で圭一郎と紀香の結婚話が一気に広がってしまったが、それはそれ。

嘘が本当になるはずがないし、二人の間には富士山よりも高いいくつもの壁がある。

圭一郎は誰が見てもハツとするような美男である上に、名家生まれの優秀な脳神経外科医だ。

せめて、圭一郎がごく普通の庶民なら二人が本物の婚約者になる可能性が一ミリくらいはあったかもしれない。いや、それすらもおこがましいと思えるほど、彼の外見は完璧だし、容易に人を寄せ付けないオーラがある。

（圭一郎先生って、会長と会ってるときと、そうじゃない時じゃ表情の柔らかさが全然違ってたよね。それだけ会長を大事に思ってるってことかな）

忙しくて十分に手をかけられなかったとはいえ、早くに両親を亡くした圭一郎にとって、瞳は心の拠り所よせのような存在だったのだろう。

彼に温かい家庭を築いてもらいたいという瞳の願いはもうしばらく叶いそうもない。圭一郎にはまだまだ恩返しをさせてもらいたいところだが、この件に関してはもう自分にできることは何もなかった。

このまま適当にはぐらかし続けているうちに、圭一郎が瞳に破局を告げてくれるはずだ。

あとは、頃合いを見計らって婚約破棄を匂わせ、噂の沈静化を待つだけ。多少居心地の悪い思いをするだろうが、圭一郎に恩を返せたならそれでよかった。

できるなら、もう一度会いたい。だが、会っていたらずらに乙女心を刺激するのも考えものだ。

（なあんで、会えるわけじゃないでしょ。健診をお願いしているとはいえ、あんなに大きな病院だもの。仮に伊坂総合病院で受診するにしても、圭一郎先生に会える可能性はものすごく低いよね）

健康診断は同じ敷地内の東館で行われており、脳神経外科医の彼がそこに出向く機会などなささうだ。

あれこれと考えながら夜を迎え、オムライスと作り置きのお菓子を食べていると、ソファの手元に置いていたスマートフォンが音を奏でつつぶるぶると震え始めた。画面を見ると、かけてきたのは母親の様子しよこだ。

「はい、もしもし」

『ちよつと、紀香！ もう、お母さん、びっくりしたわよ！』

電話に出るなり大声でそう言われて、驚いて耳からスマートフォンを遠ざける。

「な、何っ？ 何をそんなにびっくりしたっていうの？」

『何をつて、あんたったら、いつのまに大病院の御曹司と婚約したのよ！』

「はあ？ ど、どうしてそれを——」

紀香はテーブルに置いていたグラスをひっくり返す勢いで立ち上がって、大声を上げる。

『今日の昼に、突然姫野庵の前に黒塗りの車が停まったのよ。誰が来たのかと思ったら、伊坂瞳さんだったの！ それで、私が着けていた名札を見て「八木沢紀香さんのお母さまでいらっしゃいますか？」って。お母さん、もうびっくりしちゃって——』

「ひ、瞳さんが姫野庵に？」

よもや、彼女がそこを訊ねるとは思いもよらなかった。驚きのあまり持っていたスプーンが指をすり抜け、音を立てて皿の上に落ちる。

『伊坂瞳さんが来店しただけでも驚きなのに、そのお孫さんと紀香が婚約しているだなんて、お店の人もびっくり仰天だったわよ。なんで言ってくれなかったの？ お父さんったら驚きすぎて

腰を抜かす勢いだっただから』

姫野庵には喫茶コーナーがあり、瞳はそこに腰を落ち着けて祥子相手にひとしきり話していったようだ。話題はもっぱら紀香についてで、小さい頃の夢はプリンセスだったことから、マンションで一人暮らしをしている現在のことまであれこれと話したらしい。

「私の個人情報、だだ洩れじゃないの!」

『もうじき義理のお祖母さまになるんだから、問題ないでしょ。それにしても、さすが天下の華道家だわ。国宝に指定されているお寺での結婚式をセッティングしてくださるなんてねえ』

「へ?」

嬉々として話す祥子によれば、瞳は一般の予約を受け付けていないそこでの挙式を、特別な伝手を使って可能にしたらしい。

話が飛躍しすぎて、頭がついていかない。

何がどうなつてそこに行きついたのか。それを聞こうにも祥子のマシンガントークにはつけ入る隙がなかった。

『いろいろあつて男性不信気味だった紀香が選んだ人だもの。きつと優しくて包容力のある人なんでしょうね。そうじゃなきゃ、紀香が気を許すはずがないもの。なんにせよ、よかつたわ。私とお父さんはもちろん、親戚もみんな大賛成だからね。ところで、明日にでも一度帰つてこない?』

「む、無理! 急にそんなこと言われても、いろいろと予定があるし……」

実家に顔を出せば、根掘り葉掘り聞かれるに決まっている。

紀香は、どうしても外せない用があると云つて実家への顔出しを断つた。

『話を聞けると思つたのに、残念だわ。もしかして、デート?』

「えつ? まあ、そんな感じ」

以後もあれこれと質問されたが、曖昧に誤魔化してなんとか通話を終えた。

脳内はパニックになつており、何をどうしたらいいのか皆目見当もつかない。

紀香は持つていたスマートフォンをベッドの上に放り投げ、床にへたり込んで自分の太ももを両手でバシバシと叩いた。

「なんで? 圭一郎先生は『この件に関しては、これで終わりです』つて言つたよね? それなのに職場に嘘の婚約話がバレた上に、今度は両親や親戚にまで話が広がっちゃつて。おまけに国宝指定のお寺で結婚式つて……もう、どうするのよ!」

話を拡散したのは瞳であり、彼女の暴走を止められるのは圭一郎しかない。けれど、連絡を取ろうにも紀香が知っているのは彼からもらつた名刺に書いてある病院の代表電話番号だけ。瞳に聞くわけにもいかないし、今の時点ではどうすることもできない。

(とりあえず、月曜日になるのを待つて病院に連絡するしかないか……でも、上手く捕まるかな? それに、電話に出た人に、一介の健診担当者がいったいなんの用事でつて思われるかも……)

悩みながら夕食を食べ終え、寝る準備を済ませてベッドに横になる。心身ともに疲れ切つており、もう何も考えずに眠つてしまいたい。けれど、別売りだったマットレスがまだ届いておらず、仕方なく厚手のラグを敷いて代用中だ。